

西條 勉著 『古代の読み方——神話と声／文字』

居駒 永幸

古代の読み方——読み終えてみると、著者が書名に選んだこのことばの意味あるいは意図は、奥深い。それは、文芸批評はもとより、哲学や言語学の用語をも駆使して「読み」の方法・原理を求め、ただの一字もゆるがせにしないで周到に細部や全体の

「読み」を引き出してくる、そのような著者の研究の姿勢や信念を伝えることばと思われるからである。もちろん、古代文学の研究者であれば、古代の表現や作品を分析・検討して自らの「読み」を示そうとする。しかし本書は、丹念に資料操作をし、論証していくというような普通の研究書ではない。本書の場合、「読み」を導くための方法に徹底的にこだわり、正確には「読み」の前提となる「読み方」を示すところに意図がある。その意味では、本書は古代（文学あるいはそれ以前）の方法論について書かれた、数少ない研究書の一つである。

本書の内容は二つに分かれており、「I テキストを、どう読むか？」という章題で八編、「II 声と文字を、どう考えるか？」のもとに六編の論文が収められている。I の諸論は、著者によれば「作品論的な読みに対するアンチテーゼとして出した」（あとがき）という。さらに「作品」を捨て「テキスト」を採用した理

由について、「古事記にしろ万葉集にしろ、消費主義的な読み方を避けるのは、どうもわたしの体質のようで、これを生成論的な読み方と称している」（同）と著者自ら説明している。テキストとは、言うまでもなくロラン・バルトらが提唱した用語であるが、作品は作者に意味を与えられて一義的なのに対し、テキストは読者の読む行為によって多様な意味が生成されるとらえるのがテキスト論であった。著者が標榜する「生成論的な読み方」とは、著者がこのようなテキスト論を受容し、「古代」のテキストに向き合って方法化していった「読み方」ということになる。

しかし、著者は読者中心のテキスト論に取り込まれているわけではない。むしろ単純な読者中心主義を批判し、「読みの根拠は読み手の側にあるわけではなく、やはりテキストの方に隠されている」（三頁）と言い切るところにそれは明らかだ。そのような古事記のテキストに隠された仕掛けや書き手の意図をあばこうとするのが、最初の論文「隠されたもう一つの物語」である。著者の矛先は、サブタイトルにあるように「古事記の正体を探る」ことに向けられる。

例えば、アマテラスが葦原の中国平定のために派遣したアメノワカヒコは、大国主に媚びて裏切ったため処刑されるのだが、その正体は実はアデスキタカヒコネなのだという。その葬儀で親族がアデスキを死んだアメノワカヒコと見間違っ場面などは、古事記の書き手がアデスキをモデルにしてアメノワカヒコを作り出していることの証拠だと種明かしをしてみせる。書き手の意図は、アデスキはすでに王権に服属する農耕神だったので、反逆罪で死

ぬ役を「アヂスキの分身として捏造された」アメノワカヒコに演じさせ、アヂスキの名を隠すところにあつたのだという。文脈の背後に潜むアメノワカヒコの正体をあばく、それが著者の言う、隠されたもう一つの物語という（読み方）である。

しかし話はそこで終わらない。著者は、ササノヲ・オホクニヌシ・ヤマトタケルなどの神話・物語には「新・旧の対立とその解消」というモチーフがあり、その系列にアメノワカヒコも属していると指摘する。そして、それらの物語群は「（日本）」という国家を誕生させる歴史構造のメタファーであつた」（二八頁）と、古事記が目指した壮大な構想を読み解くのである。

このようなテキストの用語の規定を通して、古事記というテキストの（読み）を示したのが、「アマテラスとササノヲ」「ヤマトタケルの暴力」の二論文である。そこで私たちは著者が自らの立場を語る印象的な一節に出会う。

テキストを読むことは、自動的にイメージを受けとるだけでなく、それを操る隠された意図を探り出し、それによって、イメージが生み出される仕組みを、わたし自身の脳裏において可視化することではなければならないと思う。（二四頁）

従来の作品論を批判し、著者自身のテキスト論を示すことばである。（読み）の根拠はあくまでもテキストの側にあり、その隠された意図やイメージを引き出すのは読み手に委ねられているというのだ。その隠された意図の（読み方）は、「泥疑」の文脈において明瞭に示される。「泥疑」は、景行の「教え覚し」に対し、ヤウスの暴行という行き違いを引き起こす。ヤウスの暴力性

は「泥疑」の文脈の構造から読み取れる仕掛けになっており、古事記というテキストの仕組みの一端がここで具体的に明らかにされるのである。

著者自身のテキストに対する概念規定や考え方を万葉集の（読み方）で示したのが、「摩耗するパラダイム」「テキストとしての〈集〉」の二論文である。前者では、「書かれていることがらは、背後にあるもうひとつの意味の喩としてはたらく」（一六頁）のだとし、例えば巻二相聞の石川郎女をめぐる大津と日並の歌について、皇位を争う政治的な事件が「一人の女性をめぐるスキャンガラスな話柄に喩化されている」（二一七頁）と、そのテキストの仕組みを読み解いている。大津皇子関係歌群に大津物語を想定するのは通説化しているが、著者はテキストの視点から論理化したと言つてよい。後者でも、万葉集の、集レヴェルにおける意味の喩化というテキストの仕組みが探究されてゆく。いずれも（古代）に文学理論を確立するという、これまで置き去りにされてきた領域への意欲的な切り込みとして注目される。

古代国家のイデオロギーと記紀神話は著者の中心テーマの一つだが、「天皇号の成立と王権神話」「幻想としての（日本）」「本文と注釈／翻訳」の三論文では日本という国家や天皇号の問題として究明されている。それぞれに触れる余裕はないが、そこには筆者の「日韓交流論」（あとがき）というモチーフがある。このモチーフが今後さらにどのように展開するのか、興味深い。

著者ははじめ、言語学を専門にするつもりだったという。後編のⅡには研究の出発点から課題とした言語論が集められている。

ソシニールやメルロ・ポンティなどの哲学的な用語・概念を用いて展開される切れ味鋭い論述は、著者の研究を特徴づけるものである。

「ナ」と「ヘナ」を「ヨム」こと」は、「ヘナ」を「ヨム」という言語行為に和訓の成立を見る論である。文字をもたなかった日本人が漢字と出合い、音声のことをばを文字で書くという状況について、「文字を訓ム」ことの成立は、漢字をてこにしていれば和語そのものを客体化していくことに他ならなかった（二四九頁）と著者は解き明かす。同じくヨムことに関わって歌の韻律の問題を扱ったのが、「韻律と文字」の論文である。五七五七七の韻律や定型について、身体のリズムに支配される歌謡から考えるのではなく、意味を自覚するヨムことによるリズム現象から生み出されると説く。それはまた、文字化とも不可分の関係にあるとし、和歌文学史の最初の問題が刺激的に切り出されてくる。「土地の名と文字／ことば」も「ヘナ」の問題に関わる論。播磨国風土記の地名表記を取り上げ、「説話は、文字化された地名の解釈作業を通して形成されている」（二九八頁）と述べる。在地伝承に単純に還元されるというようなものではないのだ。

「モノとコトの間」は、「古代」の世界認識に関わる、ことばの原理的な問題に正面から取り組んだ論。モノとコトに名辞以前の写像と音響という原義的な共通性を見出し、モノがコトによって名辞化されるところにモノガタリという言語行為を位置づける。この言語論は単なる観念論ではない。理論は何度も万葉歌にフィードバックされ、新たな「読み」を示すことで検証される。

また「カミの名／不在の喩」の論は、カミということばを通して「喩」とことば以前の言語活動を説明するところにある。ちも靈格を指すことはよく知られているが、例えば野槌神（ツチ・ノカミ）という（名）記号にチからカミへの喩化を見つつ、喩の問題が意味生成や言語の本質に関わるのは、このような記号の再生においてであるとすると。この二論文は、「古代」においてことばが立ち上がる瞬間をとらえようとしたものと言える。その難問に「哲学的思弁」（あとがき）で立ち向かったのが、著者の言語論であった。

本書には「神話と声／文字」という副題が付けられている。最後の「用語の病」は、翻訳語としての「神話」の概念が日本語のコトということばに該当することを論じたものだが、著者はその文章の中で「神話」への関心がレヴィ・ストロースの神話学から「神話」は研究の出発点からのテーマであり、従って当然、本書のキーワードにもなっている。

そのような「神話」に対するテクストの視点からの「読み」がIの諸論であった。その時、古事記の書き手にとつての「神話」は問題にならないだろうか。フルコトやカムガタリとして意識されたであろう「神話」を、古事記の書き手が「書く」とはどういうことだったのか。テクストという方法に古事記の新しい「読み」を認めつつ、先に触れたアメノワカヒコ捏造論などにおいて、本書の読者はあらためてその問題に直面することになるはずだ。確かに、アメノワカヒコは「神」も「命」も付かない異種の神

であるが、この神の話は日本書紀(第九段本文、一書第一、第六)にもある。そこにアメノサグメという、民間伝承に出自をもつような神が出てくるところを見ると、アメノワカヒコはアメノサグメとセットになって語られる神話に明らかに根拠をもっていたと言える。このように考えてくると、アメノワカヒコは「アデスキの分身として捏造された」という(読み)に疑問がないわけではない。ここで問われるのは、古事記の書き手の意図をどのようにあばくかという時の(読み)の根拠である。テクスト論における(読み)の多義性は、同時にどのようにでも読めるという不安を抱え込むからである。しかし、著者は文脈の分析に徹することで、その深みに隠された書き手の意図を引き出すことに成功している。アメノワカヒコの捏造は小さな疑問にすぎないのかもしれない。全体として、著者は、古事記をはじめとする古代文学に、魅力的な「古代の読み方」を示したことは間違いない。

本書は、著者にとって「古事記の文字法」(一九九八年、笠間書

院)に続く研究書である。本書の所収論文は、古事記のテクストを文字法から解明した、堅実にして刺激的な前著の論文と書く時期が重なっている。その意味では、前に本書は方法論の書だと述べたが、実は前著の堅実な実証作業に裏付けられた方法論の書と言えらるであらう。

文学研究は作品をおもしろくするものでなければならぬ、という言い方がある。実証的な研究はとくく作品をつまらなくするから、このことばは研究者にとつて耳が痛い。しかし、本書には至るところに作品をおもしろくする(読み方)が示されている。しかも、著者は読者を惹きつける良質の文章の書き手でもある。おそらく読者は、著者の(読み方)を古事記全体に期待するはずだ。少なくとも私は、著者による古事記注釈をぜひ読んでみたいという思いにかられたことを正直に言い添えておきたい。あまり遠くない日に、それが実現することを鶴首して待ちたいと思う。

(二〇〇三年五月 笠間書院 四六判 一八三頁 税込二九四〇円)

新刊紹介

小峯和明・篠川賢編

『日本霊異記を読む』

本書は、成城大学民俗学研究所の共同研究より成った論文集である。

全体の構成としては、I 作品としての『日本霊異記』、II 史料としての『日本霊

異記』、III 『日本霊異記』と人物の三部に分かれ、計十三人十三編の論文を収める。

民俗学・文化人類学の立場からの論文を掲載する事が出来なかったのは惜しまれるところであるが、しかし、文学・歴史学からの視点を中心に載せられた論文は語彙・因果応報・殺生・夢の役割・説話蒐集の経緯とその形成過程・史料の価値・家族の実態・『日本書紀』の記述との相違・中国文

学との比較・転生譚など、扱うテーマは非常に多彩・多角的であり、またそれぞれが非常に示唆に富んだ内容を有している。

日本における仏教説話集の嚆矢である『日本霊異記』の資料的・史料の価値の高さ、そして今後の研究の可能性の大きさを本書は提示している。

(二〇〇四年一月 吉川弘文館 A5判 二九八頁 税込八九二五円)(小松由紀子)